

源氏物語



















かゝるものありては、世にあらざるべし

かゝるものありては、世にあらざるべし

源氏十帖十巻

源氏十帖十巻

源氏百人一首

○惣論

黒澤翁満述

○物語のいふ物の唐土は小説今世の学双原ありては本より  
 形も亦も又いふは故に世に接して世に奇しく  
 免るゝふる人の目をみるもさうある人なりかきては文字  
 思ひ役なりかせる物なりさひと甘作りさ南も又種々  
 て或を長き子をつまやの短く書るもけり又短き子  
 を引延てあつゝに或るもけり世にも大方に世に好くあ  
 りて世に好るも南に女なりて男女は好くは物の義理合  
 る人情の好く入るなりは世に好く事全今に学  
 双原の事ありては其文の雅あると倍あると趣向は







物多し人合さる味あべ

○母子崇式部公余りは妙文と出せしる罪より地獄に落  
 たりぬる厚悦は法師の輩はもとよりこれより尤論も  
 子たつ母あはれ世にも法も思ふは物語と書る中  
 罪とすべき事喜みけり古抄にも子あはれ物語乃本意を  
 中へ強て儒子引付佛子引付は地皇は辨を執りて  
 受くつかる一大事とても福とて物多しあはれ  
 今まゆつこふ辨を見ればあはれ朱雀院冷泉院あは  
 歴代の天皇の号も其も出せる事いれり  
 大罪あはれや本より唯其号を傳ふる事  
 殊に冷泉院の母后源氏と密通は流れる事あるあはれ

五つもあはれさしきりぬるを思ふべ  
 昔時よのる人云と出せしる始終はも  
 りとや号もあはれ思ふよ子云る墮獄の浮説は古  
 批判あはれもあはれを其序端を傳へて法師は輩はあは  
 らる子引つたさる筋いひ出せる事いれり人其引付  
 らるあはれ悪しき罪もあはれもあはれいみどく  
 笑ゆあはれど我皇國の神代あり今世人皇もあはれ  
 ぬるも白皇統絶せしる天地もあはれ天の日嗣  
 たゆ太古の天皇あはれ今上皇帝とてあはれ敬  
 事あはれしは叶はる理あはれ中頃あり此心を  
 書きしるあはれもあはれも罪を犯せる物あはれ増  
 今の世あり

物ゆゑにわががまづく人々も若は天皇は大帝よりよも悪くも  
 書にさびし聊も憐るるやまさし唐土の振ゆ移るるのれをてい  
 しも非の限をれを思へべし彼國ハ國王勢も強く子ゆく  
 たとハ皇國の武將もどの如く移り替は唐世と成てハ洋  
 世ハ他人もれば憐るる及び又明の世と成てハ唐の世ハ他人  
 世ハ憐るる及び代は替はれぬれは彼所の書どもハ  
 熱くもあつたりも出るも見習ひて其風も移り日本  
 を忘せしるるも非也則源氏物語も此群をすぬる事  
 何んかざるをわづるべし然るを近江或流し是を助て朱雀院  
 冷泉院ゆゑにわづるせむる院の名も天子をさしつり  
 こそ何んかざるもいふにわづるは是非あり世院の名

則源氏物語

○今此書を作せる故ハ世ハ小倉百人一首の書も都下行ハ  
 世ハ牛引童系くる女をさす古の世ハ何れより去りて  
 口もびりおひて忘るる子ゆきハ何れより此百首を一巻と  
 ぬりて後ハ加て世ハ弘くあつたりての自目訓安くも書子  
 世ハ叶はぬ故ハ然るに西にわづるにわづる物も世ハ調ト  
 出るる書の日書ハ一りて何れも物も世ハ行はるるか子孫益行りて  
 老るる男女もそも子孫ゆゑに百人一首と誰かぬ老もぬく山乃  
 奥高はそもそも行はるる之世ハ後ハ是も習ひて何れも  
 たるの世ハるるごとくやうに遊りて調ト出るる或ハ伊勢物語或ハ  
 古今集ゆゑに始り則源氏も源氏もことごとく世ハ何れハ







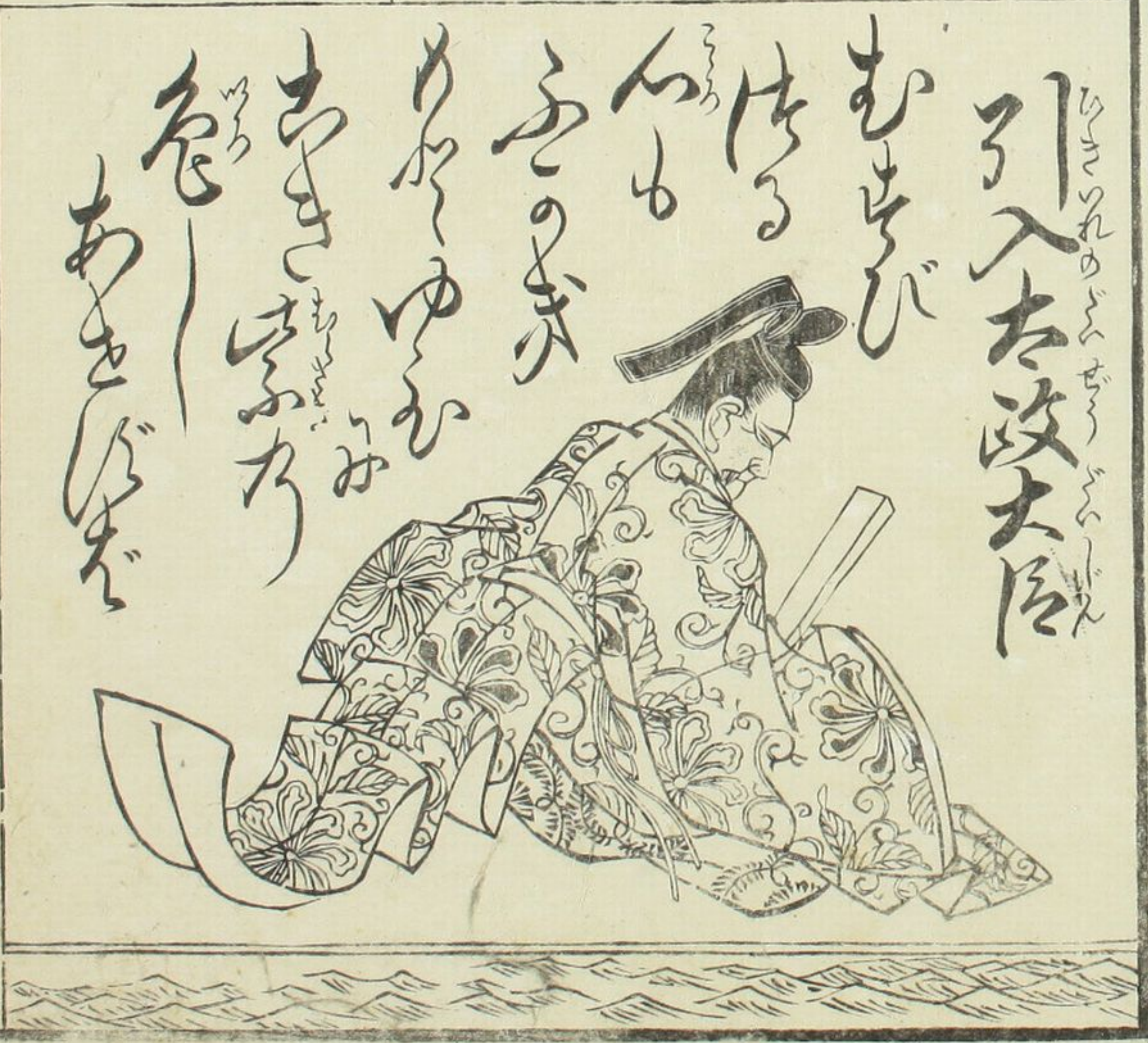




按察大納言の下の方にて相  
 毒の毒の母なるは既に  
 上の勅負の命婦の母乃  
 逐一あると云たさるるが  
 へははちねお命婦は  
 居使とて内出りては  
 洞とて入るるを中によ  
 せりて入るる昇殿の人を  
 女にうけしむるは上人の  
 浅ぢ大信子のつをなはし  
 る所なりけり



せりぬか冠とははるる  
 入道とて也葵の上は父源氏  
 の法皇のついでにはるる  
 吉政大臣はるるはるるの  
 りあはるる源氏加冠の時  
 相毒帝〇いさきおまき初元  
 ゆいふおまきとてはるる  
 ともかけさせるとはるる  
 侍のついでにはるる我志の  
 侍とてはるる源氏の侍とて  
 替はるる世とてはるる  
 おまきおまきとてはるる  
 ありはるる組とてはるる上  
 いはるるはるるおまきとてはるる





左ののびの指とくひひまた  
る女まし別上の別は返す  
んを是と云々のさめゆの  
まふれを我をむらふ教へ  
つひにまてはるはまは  
別るべき折あんとて  
是れを君が心を別る  
君はほふ別るはま  
こ折るはまはま  
ひまはまはまはま  
ひまはまはまはま

わのま  
手を  
らや君の  
まはま  
かおへ  
ひらふ  
ふれあを  
指喰女



左ののびの指とくひひまた  
る女まし別上の別は返す  
んを是と云々のさめゆの  
まふれを我をむらふ教へ  
つひにまてはるはまは  
別るべき折あんとて  
是れを君が心を別る  
君はほふ別るはま  
こ折るはまはま  
ひまはまはまはま  
ひまはまはまはま

琴音殿上人

琴音殿上人  
月出  
えあ  
ら無  
若あ  
はま  
人  
とらん





儒者の婦もさあつち上り  
影のうつし心は遠くをて  
不測は深き中なる  
屋のりまをえしはも何  
の恥つさきつりもた  
あはれがたきくは  
くまを中へ

いやははは

蒜喰女  
あまこもの  
おを  
へそめ  
中あま  
ひるま  
何のほを  
うすま



大いぬか母相妻の弟は  
姑母かおろす弟は  
とをえらるる次友位を  
兼兼は書に大政大臣  
老ふ致仕の表と  
まふはるは姑を  
との中を  
さむい  
夕きり  
は若の  
まはは  
事は  
く下は  
本の  
たそ  
見え

致仕大臣  
我病  
藤の  
たそ  
あま  
か















北山の尼姑... 源氏物語... 北山の尼姑... 源氏物語... 北山の尼姑... 源氏物語...

少納言乳母... 源氏物語... 少納言乳母... 源氏物語... 少納言乳母... 源氏物語...




北山の尼姑... 源氏物語... 北山の尼姑... 源氏物語... 北山の尼姑... 源氏物語...

小山僧都... 源氏物語... 小山僧都... 源氏物語... 小山僧都... 源氏物語...



源氏の遺徳をわがしるす  
聖人の上より下りて源氏の  
清徳をたまたむるよめる  
ことよほきつてまのあひ出  
る事あきと聖人なりたま  
貴人の清徳あふ出ていさ  
らぬ清徳をたまてまの  
とつんとまよせよめる  
その清徳集りしつと  
はる

何某寺聖人  
奥山乃  
松の  
水原  
おもと  
まよせ  
あけ  
まよせ  
かほを  
るるれ



式部心の子は清徳母を梅  
大納言はわがめ之積あて母  
みよし祖母の尼みやあは  
くおにわたりて源氏あは  
らぬ清徳の徳をかたけ  
六条院小敷あはま賜へる  
氏の思ひ人の才たまの  
はたは月え日餅鏡を  
源氏〇〇は清徳あは  
みよ母子のりおき清徳  
へるまのあはるるるる  
の池水は鏡のあはるる  
うけい君を任へる  
かまへるるる池水を餅鏡  
よまへて任へるるる

紫上  
池の鏡  
万代を  
任へる  
あはる  
あはる  
あはる



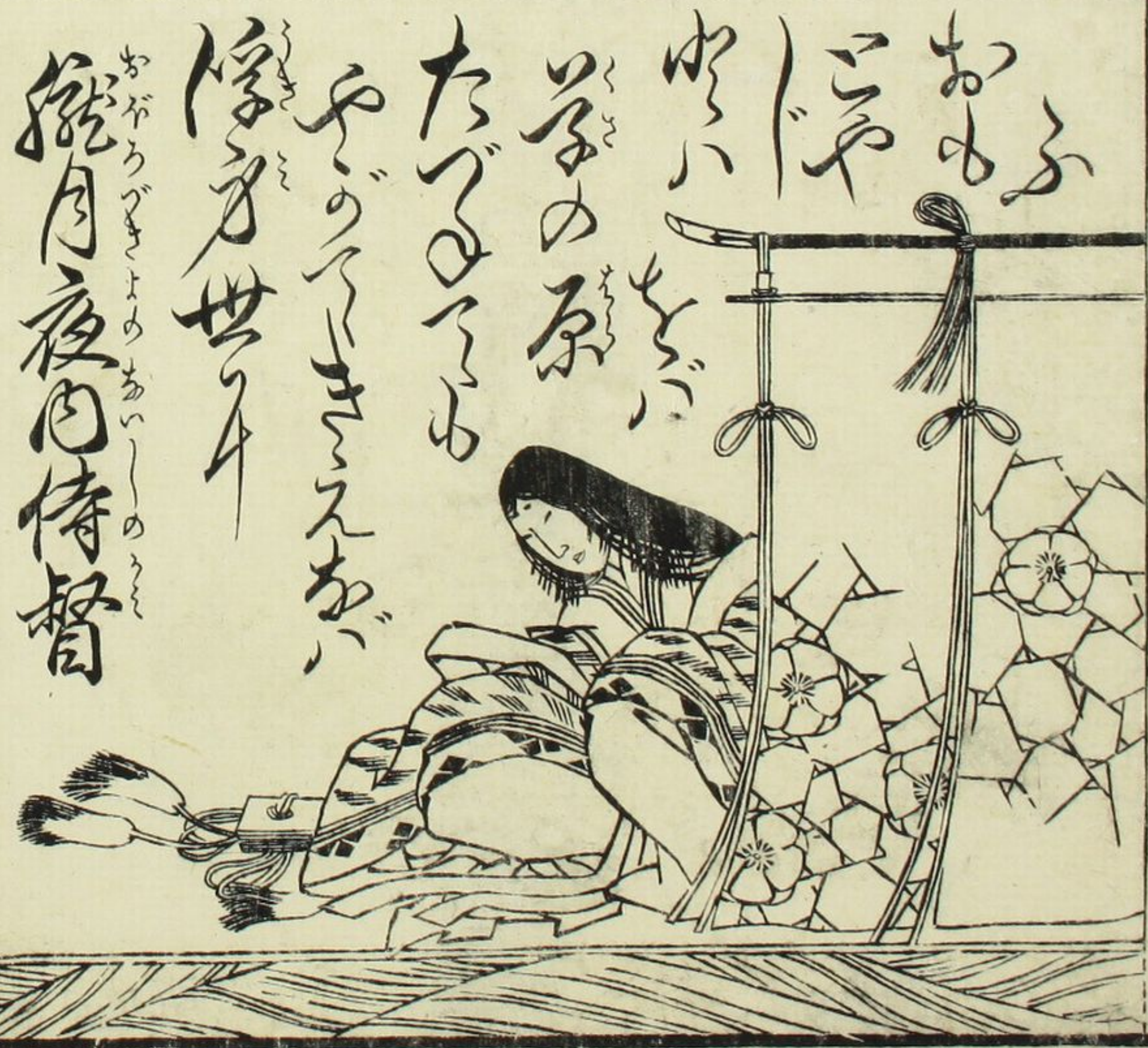








二条のおつゝの侍姫より公微  
 殿の太后の侍姫之夢のよれよ  
 朱雀院の御子よりくさくさ  
 殿と申し柿の巻に内侍の督  
 とあるころうへ源氏お姫と  
 何へるおは後おつれせんあ  
 名のしるしつりつり一着は母  
 ちうころろい我がこのまゝ死  
 つて学業の巻よかればあはそ  
 の学業の巻よかればあはそ  
 叶ふ思石の巻やとくあめしむ  
 はより捨てる人かおのひまふ  
 うねとがめたるこ



おもふ  
 二条  
 水戸  
 学原  
 たづひら  
 夕のくさくさ  
 浮世の  
 月夜内侍督

朱雀院の母方には祖父御  
 月老の父也柿巻をかきか  
 と朱の石巻をかかればあはそ  
 ちうころろい我がこのまゝ死  
 つて学業の巻よかればあはそ  
 の学業の巻よかればあはそ  
 叶ふ思石の巻やとくあめしむ  
 はより捨てる人かおのひまふ  
 うねとがめたるこ



二条右政大臣  
 我が  
 おへん  
 名か  
 らが  
 何の  
 来  
 待

源氏一書





大原家の御相堂の希は  
 如所よりを散甲の御婦也  
 此等相堂の希か進ませ  
 賜ひて後法をうけ物た  
 世に任賜ふるを海氏中より  
 ひさむひて○橋の希と  
 つりみ時をそれ御甲を  
 存せどらふと御賜つる  
 一一人目もあく荒れ  
 てゝ我の御新の橋を  
 若くはつと御賜ふ来れ  
 と御の端と御結つる  
 いまをこそ御賜ふは  
 せり



人目かくし  
 たるえ  
 橋の  
 御新  
 つり  
 あり  
 礼あり

源氏の思ひ人後ま  
 多生魚賜つる中  
 後方とあはは  
 一より一賜  
 賜つる時  
 不わ  
 御もは夜  
 免度  
 御ふ  
 を福  
 新



花散里上  
 月影の  
 若  
 袖  
 ち  
 水  
 又  
 光













桐壺は帝の皇子源氏  
の母は母后の女御  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを



源氏 桂院  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを  
の宮に生れしを



野も月と時の月は言ふは  
りくも海とては人の老くも  
相毒の帯に親く仕な  
し人由急其昔を意く  
心天子の言もき位を格  
ていりぬるあはれを懐  
揚ひくもやんと相毒の帯  
を月もよみそくを住ら  
住ま之所をうらみの月  
よりよひは回しをい  
通すく住家おほき字の  
くもよみそく

右大辨  
雲のうら  
まみこの  
捨くも  
よえ  
の月  
はまきの  
影のうら  
あはれ



又参議宮内母に言也  
明石の上は産の時も源氏  
かの浦子下り船小紅尾巻  
船夫子ふしそ京にぬるは  
あはれをばのよのあはれ  
後一船のんをばの時石の上  
別を惜まう○言はきこ山  
能ははも水をも程をぬ  
治能はも水をも程をぬ  
心たを言はふあはれ  
き昔のあはれもあはれ  
必きぬすあはれもあはれ  
心たの通も言はふあはれ  
らに物もあはれもあはれ  
里ねるもあはれもあはれ

明石乳母  
雪君  
よのあはれ  
山を  
舟も  
人の通も  
河の流も  
あはれ





相臺の帝は白王子厚氏のはか  
と猶おらの宮を以てひり  
女史子孫の宮に生れ  
老をかくれ跡なきま  
恋て涙をみよるま  
考もおもふ思ひ  
物まはらばすそ人の思ひ  
こころははるるも  
思ひふ火をきこ

螢兵部卿宮  
なま考も  
おの  
こえ  
あひ  
あひ  
人のつみ  
まゆるみ



父は古き年少武母は文藝の  
乳母は文藝の世に後玉  
のづもをうそく父母は  
筑紫子下り年経て玉苗  
阿茶の時に彼所を  
人く下は兵部卿の天の婦  
は影に筑紫ふり時  
は何れをさるるを  
おれ我れを文藝を  
くかりのまれ舟人も  
とくううらぬ思ひ  
ゆきと大高は筑紫  
は浦いひを  
か

兵部卿  
舟人も  
あひ  
大高  
の  
考の  
あひ











りんく下は四人にこれ秋好  
 此女房之威の上は法方の  
 ちん子君よまねて舟にの  
 ちこれ地を焚くうてよあ  
 ることども心風吹むの  
 やに波のたてるまの波  
 さく移るる糸をそ珠の  
 山ふきのいろは又ゆへん  
 名なたるる山さきの崎を  
 らんく山さきの崎を  
 近江國の地名なり



あれもは所をほめてよめる  
 之心は妻は法は此池水は  
 井手は川流子通るるまや  
 ちんく人君の山吹糸う  
 て水底まぐもあはるる  
 しきゆまいしきゆまい井手  
 ち山吹の園山吹の名なり



源氏一首

三十四

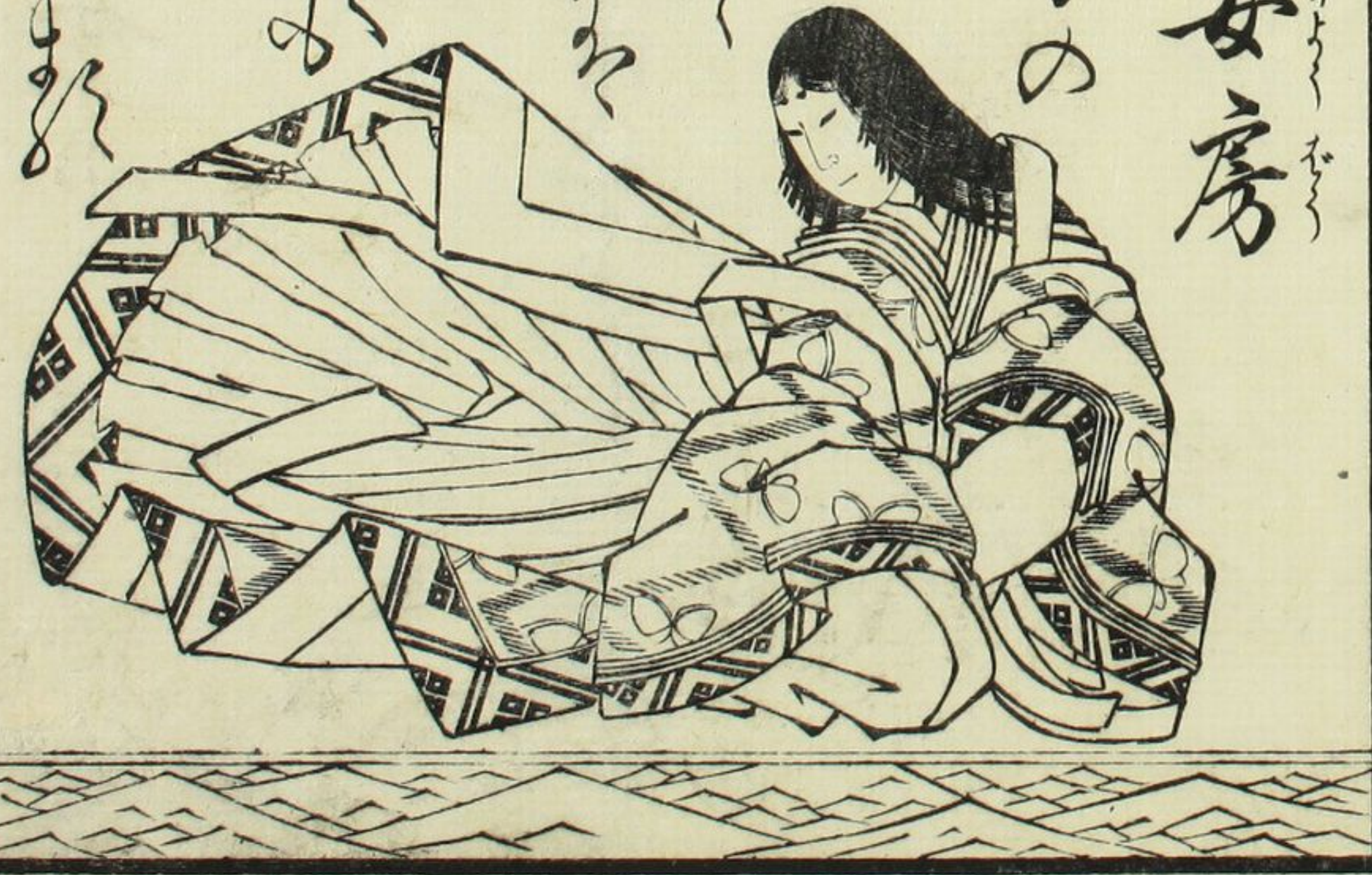
花の上の山より花葉を  
ひたす子よとて心蓮葉  
はふも存存求る不及を  
ひたすはちの面おもひ物  
おもひひもつとれん心  
くらしはれ不老不死乃  
なごころの存子けりめん  
く蓮葉を存る程子存子  
舟の内より老くるといふ  
子によくとて母の心も  
老きよりに云々

花の上の  
かたのへ  
おもひ  
母の心  
老き  
なごころ  
あや  
はこ



今日のまはるも  
くまのむらさき  
糸さすのむらさき池乃  
る子持さすめがれは  
の常もむらさき  
かえりて面おもひ  
と持さすさすといふ

春日女房  
まはる  
くまのむらさき  
糸さすのむらさき池乃  
る子持さすめがれは  
の常もむらさき  
かえりて面おもひ  
と持さすさすといふ

















大納言の乳母まで始末を井  
 原の申を取持ててははるに  
 ちいさな甘平をさしける文大  
 臣はゆきゆきと文大  
 臣の時を始つてははるに  
 して大納言を丹かへははるに  
 大納言の申を取持ててははるに  
 我為子いまへたもの  
 大納言の申を取持ててははるに  
 かりし大納言の行末おれは  
 二葉も花もやのよせたり

宰相乳母  
 以ておきしを  
 のげおきし  
 たのき  
 みる葉  
 根より  
 のはきし  
 松よりおきし



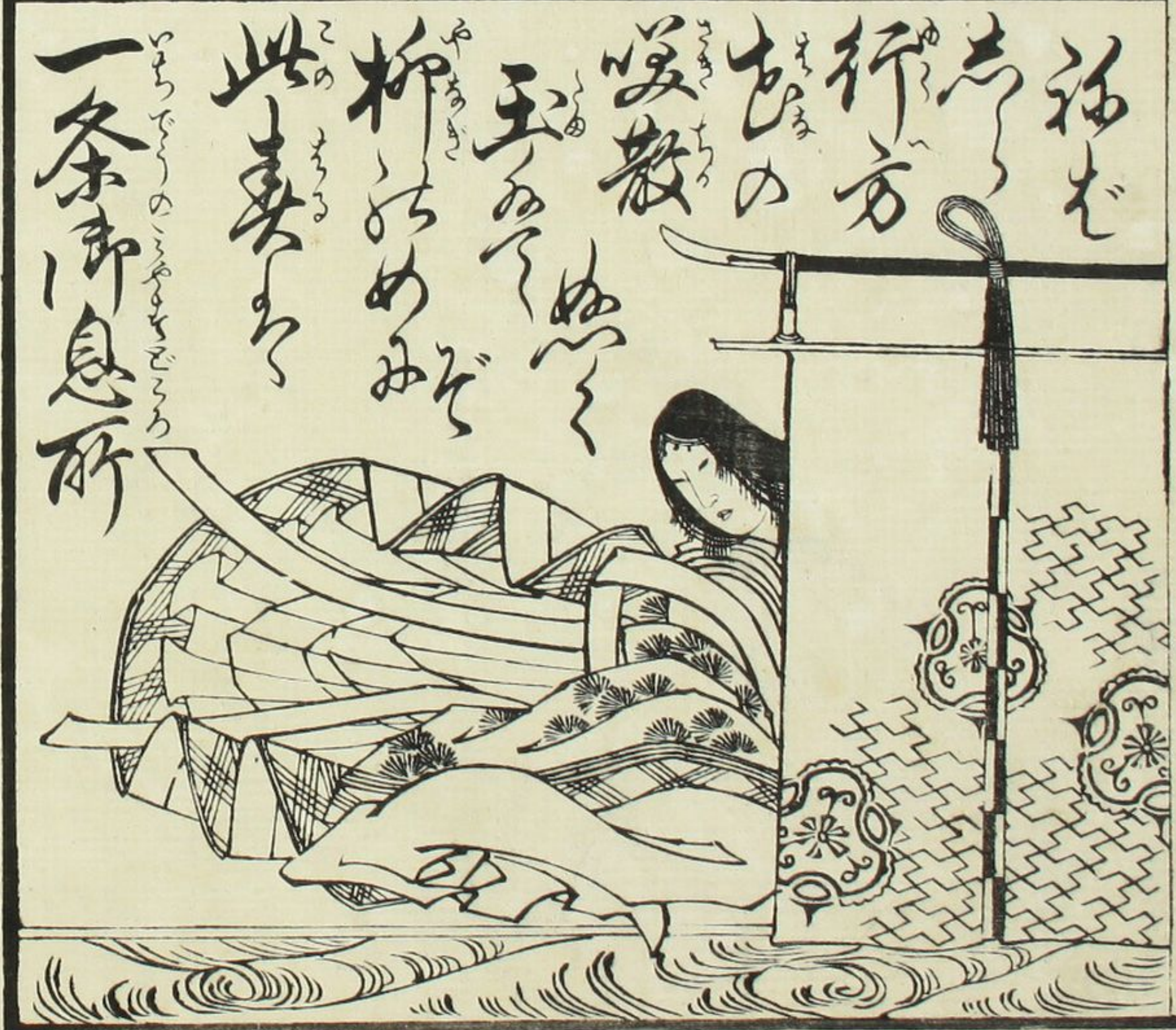
二葉は女三宮の乳母の娘  
 子て別この言まはるは  
 仲立おれははるに  
 ちいさな甘平をさしける文大  
 臣はゆきゆきと文大  
 臣の時を始つてははるに  
 して大納言を丹かへははるに  
 大納言の申を取持ててははるに  
 我為子いまへたもの  
 大納言の申を取持ててははるに  
 かりし大納言の行末おれは  
 二葉も花もやのよせたり

小侍  
 出お  
 山より  
 およき  
 枝より  
 あり  
 かあはる



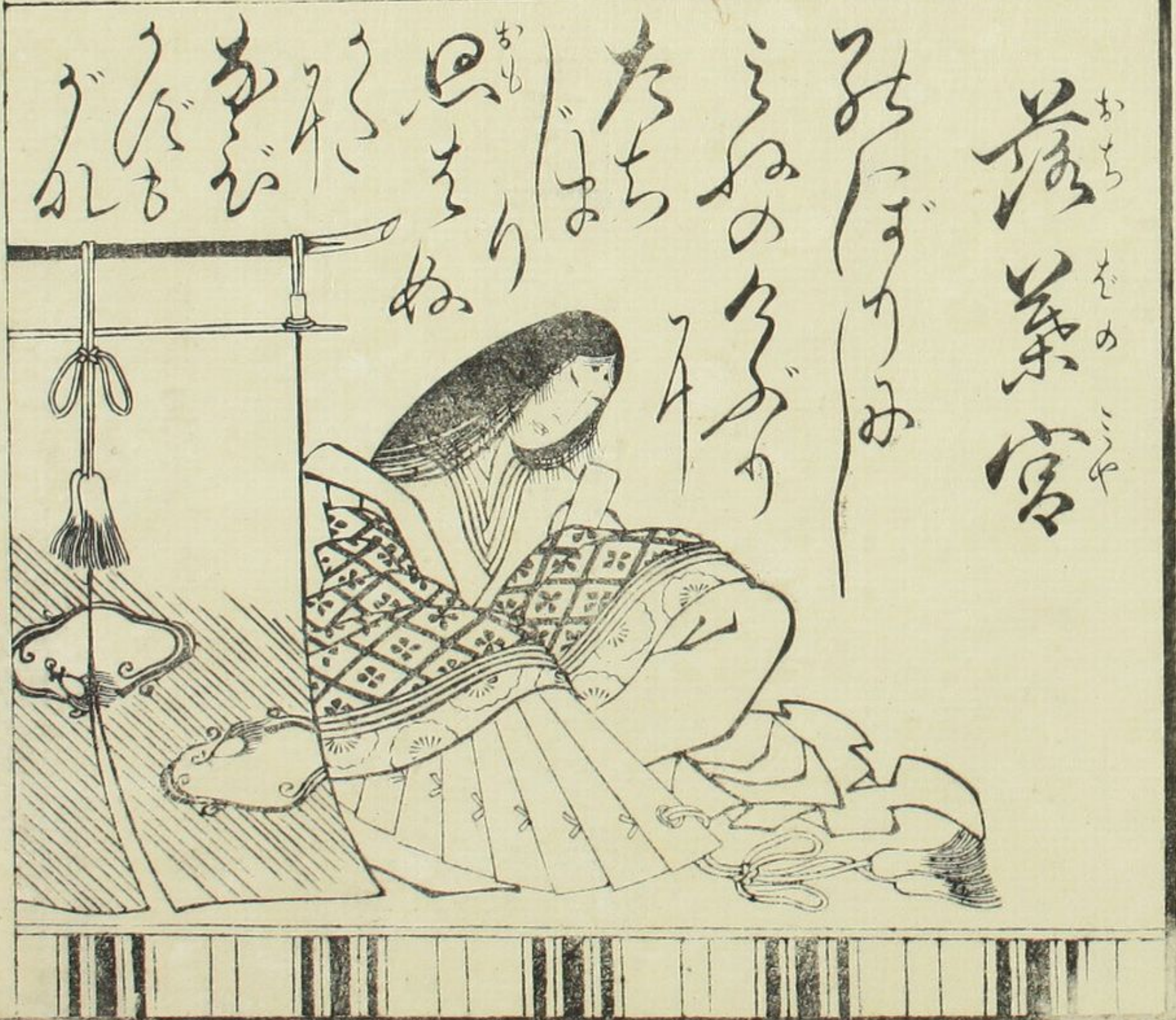


朱雀院の更なるて前葉宮  
 此母此路の前葉宮 柏本  
 の北の方よりいへ 後み柏  
 本とせむと夕霧とふい  
 て 〇時しはれがかりぬをま  
 白ひたり 行枝樹を 宿り  
 橋もととらふけられぬ  
 今季の妻の 柏本の行方  
 あれを死せむとせむと  
 後の玉目と流せとと 柳の芽  
 小倉の玉目たるふいひ  
 て 柏本の死を花の敷しは  
 せむと



福を  
 行方  
 世の  
 涙散  
 玉あり  
 柳のめ  
 此妻  
 一条清息所

朱雀院の室女より二宮へ  
 母下宿は更なる後より  
 巻玉 柏本北の方より 柏  
 本とせむ 後夕霧の思も  
 とせむと 一条の思も  
 小野宮よりいへ 後み柏  
 本とせむと夕霧とふい  
 て 〇時しはれがかりぬをま  
 白ひたり 行枝樹を 宿り  
 橋もととらふけられぬ  
 今季の妻の 柏本の行方  
 あれを死せむとせむと  
 後の玉目と流せとと 柳の芽  
 小倉の玉目たるふいひ  
 て 柏本の死を花の敷しは  
 せむと



落葉宮  
 能はり  
 世の  
 涙散  
 玉あり  
 柳のめ  
 此妻  
 一条清息所







玉尊は女房より玉尊  
 其の傍にのり左に付  
 扇の方へきりて路を  
 ころに橋より物いさへ  
 せよかこより教ふる物か  
 れを傍よりしんまを真  
 らしむく懐く懐くもたら  
 けくひちまきこ

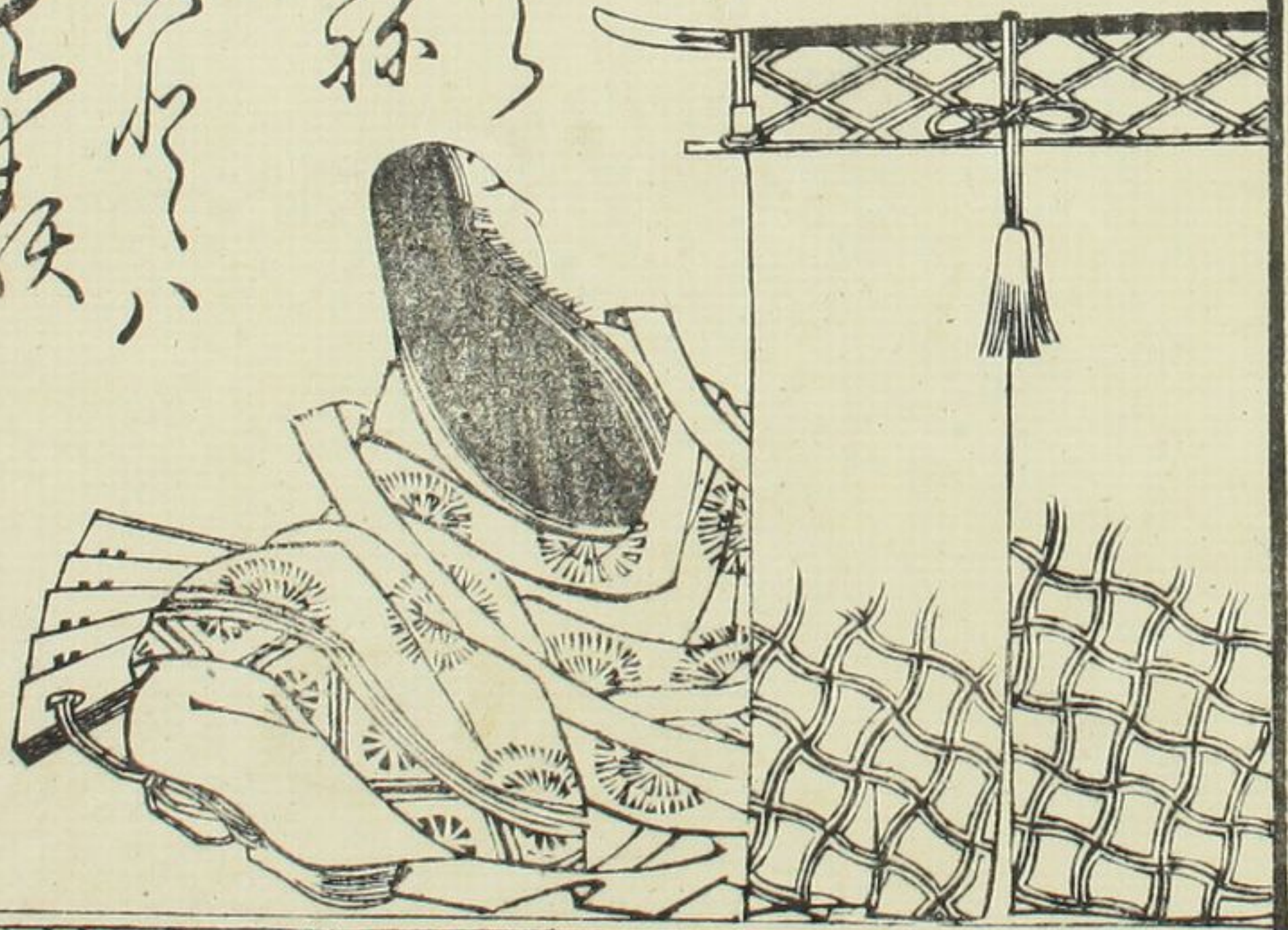
宰相君

さくら  
 のき  
 散ゆる  
 ちちが  
 肩を  
 あのま  
 恨み  
 せむ



扇方の女房は母玉尊  
 のゆづりこみり内侍督  
 衆人へは路の上へ  
 其のまを侍り海へんを  
 舟はふるまの敷行に母を  
 のみりまを侍りしり  
 も是に木をたんには方物  
 袖をきりぬは何とも思  
 むらぬににりて思極  
 べしとて枝をたんにの本  
 もよりのたんに上の家樹  
 影をけりてたんに

兄  
 ちち  
 うま  
 枝  
 世  
 風  
 扇  
 方  
 内  
 侍  
 督





同所は女房より是の御  
時の傍に法方と云の心ハ  
橋もみよては夜にさき方の  
傍にありて別池の右  
はうに落るおよそ水  
乃津水集てもやう我方  
子流るるべしと花子物を  
いふつらやまといひて負  
方子ねがしむるは行み  
おとろへり

大捕君  
心何れ  
以ち法  
まじいみ  
落るる  
阿ま  
お  
我方  
ま



おねがひくお方おつとを  
せし女房ありてなまじ  
くは花と拾はまきと見  
るはくくくくくくくく  
おのちれは甘散くくく  
則我方は物をねがはるは  
如くおま集るくくくく  
見るはくくく

大空乃  
風年  
さるる  
おのの  
かまの  
見



女をばあはれに左まつて  
賢者の方人さし人さし  
いふさふさう我物か子のゆ  
くも花の風は自由の吹き  
は物あふさ甘白いさ人  
のつこく散さすと思ふ  
も大空をわたりて程のち  
袖に世まはる物にわたり  
とまかすささささささ  
は風を散らさすさささ  
○さささささささささ  
さささささささささ  
あり



回所は女房は影は蔵人  
の上の件ある基のつて  
をかまみく我の色の  
は負さす悔し思ひ傷  
ま在て助言さすつて  
物をさす○いはや  
あはれさすさささ  
は心あつたりと悔  
返さすは是非ささ  
そのさささささ  
強きささささ  
あつてお人のさ  
うあさささ  
さささ







秋帝は皇子を母ハ明  
 石中宮は白宮を母ハ彼  
 兵部は子母を母ハ彼  
 宇治のちえんを母ハ彼  
 山風をかき吹く考に  
 遠か痛て足ゆる遠の  
 水は泳ぎのまはるる  
 六川のわたるる痛ち  
 河の波は踏みぬる毛  
 風子吹くまはるる今  
 まのけりるまはるる  
 一まはるる



遠の  
 水は  
 泳ぎ  
 の  
 まは  
 るる  
 六  
 川  
 の  
 わ  
 た  
 る  
 る  
 河  
 の  
 波  
 は  
 踏  
 み  
 ぬ  
 る  
 毛  
 風  
 子  
 吹  
 く  
 ま  
 は  
 る  
 る  
 今  
 ま  
 の  
 け  
 り  
 る  
 ま  
 は  
 る  
 る  
 一  
 ま  
 は  
 る  
 る

優修塞宮の姫 総南姫  
 天竺同胞の姫 総南姫  
 白宮に奉れぬ 白宮に  
 回宮は二条院子 近し  
 皇子生かぬは 皇子生か  
 仕里に生かぬは 皇子生か  
 御侍なり ○ 御侍なり  
 雲井をいふ 御侍なり  
 さをわける 御侍なり  
 おうらうらうら 御侍なり  
 時雨ふるころは 御侍なり  
 うる物思ひは 御侍なり  
 若もやわらわは 御侍なり



宇治中姫君  
 深山の里を  
 御侍なり  
 御侍なり  
 御侍なり  
 御侍なり



又ハ夕霧母ハ孫内侍ナリ  
この際もよきおかしき事案の  
富には人いれよと云ふ石中  
宮は流儀も多しと云ふ  
あつと云ふ山里は石中  
は後の面もさしと云ふ  
を行さしと云ふ秋を  
を見控へいづと云ふ行え  
子に

右衛門督  
以つとあり  
秋を行  
久  
山里の  
りらら  
のハハ  
しきい



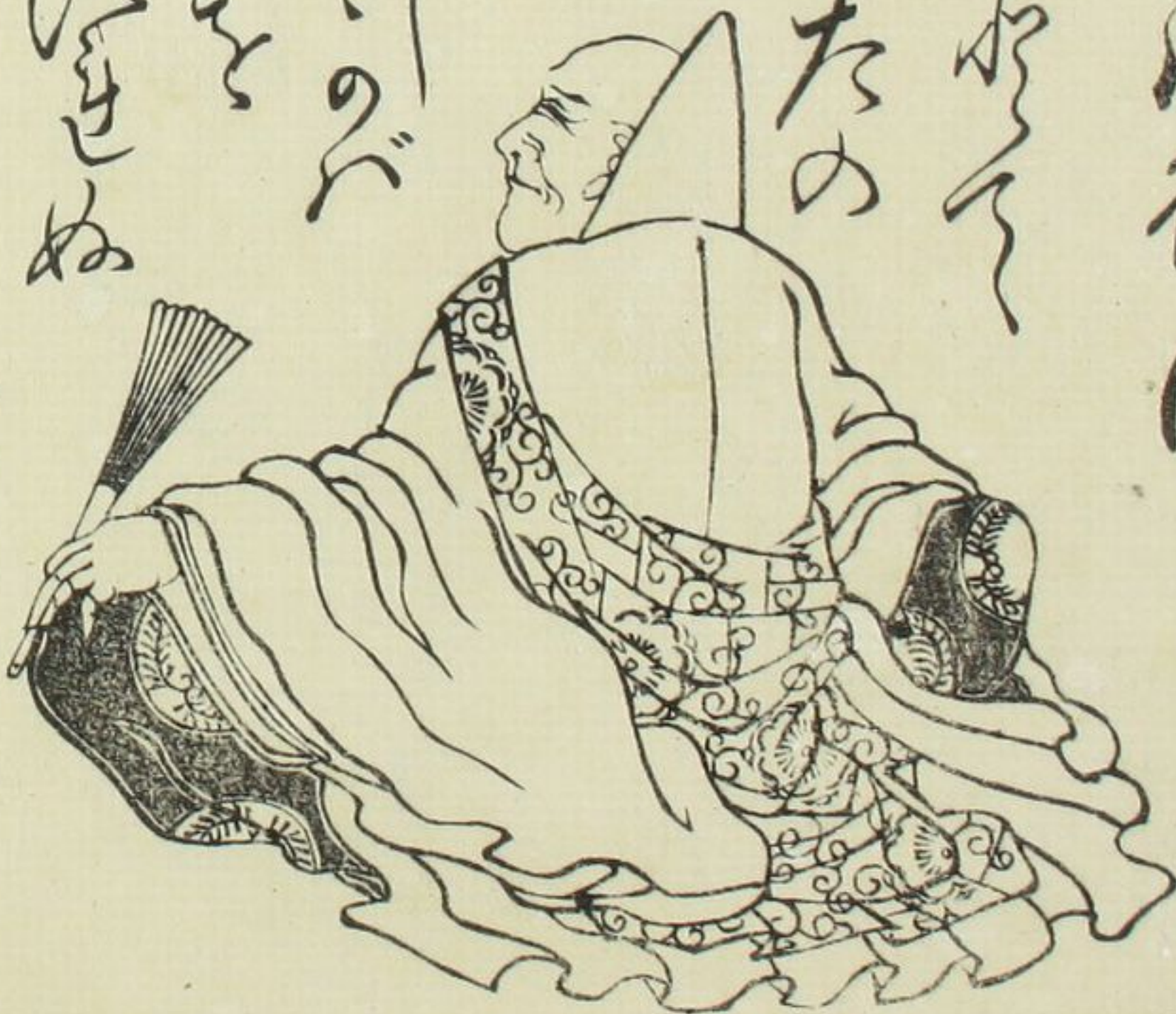
石中宮大進は人を老  
人より昔の優俊塞宮を  
も見あはるる人を見も  
時中宮の御子と云ふ  
はよと云ふ極と云ふ  
を愛に住て人なり優  
俊塞宮も今ハ物  
石垣子葛はん長と云ふ  
はしるるなりれと云ふ  
はと云ふ長と云ふ  
と云ふ

宮大夫  
久人元  
あま  
山里の  
岩  
垣  
あま  
長  
を  
しるる



優徳の宮の法律師あり  
 橘姫を阿闍梨姫と名  
 子律師とあるは此の宮を  
 法宮からしめし後子  
 姫は姫君たりて手始は  
 藤つとくもを信じてまわ  
 ざるも此の父宮に生母の  
 教を奉る事一か例ありは  
 いづれの志をもて思はねを  
 うりに存る藤をかくま  
 を様子藤を掃くをま

律師  
 宗治律師  
 君は  
 阿闍梨の  
 法を  
 つと  
 己は  
 けり  
 那



父は左中辨母は桐本右衛門  
 智の乳母と字法言子仕  
 終南姫君がらぬして後子  
 教を奉る事一か例ありは  
 姫君のせもつとくまわ  
 解る人へ何事もつきても  
 まづ彼のとほれし心ある  
 をかりぬると世渡の心か  
 かりぬげると姫君も  
 おられ死すうううと

辨尼  
 命  
 人子  
 命















小野尼の娘は昔ははれや  
 娘とて後には小野尼浮舟  
 娘君をよきとるを恋へしあ  
 る心は村の人乃いひよるも  
 あぢりやあつれあふも  
 我物と領せんや者より  
 小舟を渡はれ程いそぐも  
 叶ひあふと女言ふもあふも  
 一つあふと志先ゆか領せら  
 りくはれど他國をたぐ  
 一國他人をたぐく人たぐ  
 ① 他國の國をたぐく

中将  
 浮舟の  
 風子あはれ  
 女言ふ  
 我一先  
 申さん  
 路水はる



横川傍者の娘ははれや  
 舟娘君を善取てう娘は  
 勢々に聲は中おも遠きん  
 小野がんも思ひは種進  
 ちれはも浮舟はあふも  
 やむて剛上の娘ははれや  
 心はるもはれははれはる  
 中は居しはにらお世も  
 ちきたるもははれ物も  
 は娘君善取てう尼はけ  
 ちき物はつひもてん心  
 芳しはもてん心も  
 は庭子女言ふを種一殖  
 るたははれはる

小野尼  
 ちね  
 おりむ  
 世ぬ  
 女言ふ  
 ちき世を  
 ねむひく  
 子ははれ



天保十年己亥十二月發行

松軒田靖書  
婚齋清福画  
玉山書堂梓

武藏國埴玉郡忍藩

黒澤翁滿先生著述書目

言靈抄上編

此書ハ初の活きや、群の結元と假  
字法つひの二をとり、群ハ其の音  
便通音延約表法助群の類も、  
元ハ歌交子付て用ひる事ハ、  
り、  
子丁教僅子二十葉に色ハ後世  
何の類の相を、  
き古人は格を、  
る事と、  
接を、  
人は云る群の結元ハ法則と、  
一、僅子十三群と記憶を、

原氏一首

万葉集大全

仙覚ハ万葉抄を始、  
記、  
書、  
略解、  
、  
、

古今集大全

顯注、  
遠、  
編、

書目一

一切の辭を誤らざる早道をさと  
され又假字の殊に多端なる物  
をさとすも僅に百子一二を  
人として其余一切の假字を  
納る弄法を新に考へ出さ  
詞の活きもんを考へて  
よきもの如く考へて初  
案師より考へて獨歩の  
よきもの如く考へて

### 同中編

一切の辭凡そ二百五十余  
考へて其辭のものを  
細に考へて其辭のものを  
やう并新古の差別を  
學の考へて其辭のものを  
集はれしむる古來  
とる所の辭のものを

らして僅に四卷の  
是る古今注釈大成の

### 神樂催馬樂抄

世に傳へたるを  
愛知縣居の海の  
る物に根を  
古に考へて

### 北勢古志

伊勢國風土記の抄を  
案名負辨朝明の二郡の  
の郷の名に  
とる所の

### 示正論

格格のつづらひ  
の何れのもの  
とる所の

### 消息案文

世に消息の書  
或は高き  
信用を  
用を  
考を  
祝儀  
且消息  
倍倍  
部部  
とる所の

### 同下編

二十音の解法  
皇國の言  
はる所の  
よきもの  
考へて  
他の  
はる所の  
活約活約  
とる所の  
又辭は格



乃拙を痛く一且一版の活相おの例  
 子直るも姑く一様は法考一  
 き相もを論一法見一終まハ  
 法則を註き一又法別は入る相  
 法は法を聖妙ある事と細りみ  
 海一つとせぬなり

隨意稿

同しき法考は中よりよかれ法  
 盛頼の善悪の論天物仙人の説  
 中女外漢出の今や一法冥子舎  
 ゆる亦法ぬゆの類一き一耳  
 新しき法もをの集められり

道行振

こそ古きもの出くるはつ  
 きふしを何とせぬか  
 従ひておのれを直進するは  
 儒佛の輩は法をくみり

童話長篇

昔話の古知崔梅を原の歌を  
 く古の長歌子賦一法出子平  
 了女出所を考られぬは  
 一法を善法考りぬ

天保十二辛丑年正月

發行書林

- 芝神明前 岡田屋 嘉七
- 日本橋通二丁目 小林 新兵衛
- 本石町十軒店 英 大助
- 中橋廣小路 西宮 弥兵衛
- 通壹丁目 須原屋 茂兵衛
- 浅草茅町 同 伊八
- 通四丁目 同 佐助
- 通貳丁目 山城屋 佐兵衛

